

黒目達朗（高校21期卒業） 「治安の課題」

刑法犯罪発生・検挙の推移（1）

1. 現在、犯罪統計として確認できるのは昭和8年（1933）からである。
刑法犯罪の発生件数は、戦前から戦後の昭和時代まで150万件内外である。
戦前と戦後では社会構造に大きな変革があり、人口も約2倍になるうかという状況の下で、150万件内外という一定の数字が保たれていたのは、ある意味驚きである。
因みに昭和8年の人口は6,743万人、昭和58年は1億1,953万人である。

刑法犯罪発生・検挙の推移（2）

2. 一定水準で推移していた刑法犯罪の発生件数は、平成の始まりとともに増加の一途をたどり、平成10年には200万件を超えた。
増加はさらに加速度を増し、平成14年には285万件と、統計史上最大値を記録した。
発生に反比例して、検挙件数はどんどん低下し、14年の検挙率は20.1%と極めて低いものとなった。
平成7年にオウム真理教による地下鉄サリン事件をはじめとする過去に例のない凶悪事件が発生し、このころから日本の治安の悪化が声高に言われるようになった。
全国警察は、平成10年頃から、やっきになって検挙、防犯対策を講じたところ、平成15年からは連続6年間減少に転じ、昨年は181万件と、平成8年当時の水準に戻すことができた。
本年上半期も前年に比して大きく減少しており、今後もこの傾向は保たれるであろう。
治安は間違いなく再生の道をたどっている。

日本の人口推移

昭和8年（6,743万人）	昭和53年（1億1,953万人）
昭和18年（7,390万人）	昭和58年（1億1,953万人）
昭和23年（8,000万人）	昭和63年（1億2,274万人）
昭和33年（9,176万人）	平成5年（1億2,456万人）
昭和38年（9,615万人）	平成10年（1億2,647万人）
昭和42年（1億19万人）	平成15年（1億2,769万人）
昭和43年（1億133万人）	平成20年（1億2,764万人）
昭和48年（1億910万人）	

重要犯罪の発生・検挙推移

- 刑法犯罪の中でも重要犯罪に絞って、その推移を見てみる。ここでの重要犯罪とは凶悪犯罪と窃盗犯罪をさし、凶悪犯罪とは、殺人・強盗・放火・強姦をいう。
- 全刑法犯罪の検挙率は、昭和の時代には50～60%を保っていたが、平成に入ると

最悪時は20%台に落ちた。14年を底に少しずつ盛り返してきている。

凶悪犯罪の検挙は過去には9割近い数字であったが、これも最悪時60%台に落ち込んだが、以後盛り返している。

刑法犯罪のうち8割近くを占めるのが窃盗犯罪であり、検挙率の善し悪しは窃盗犯罪に左右されているのが実情であり、この数字も徐々に上向いている

今後のさらなる課題は、検挙率のより以上の向上である。

殺人事件の発生・検挙の状況

凶悪事件を代表するのが殺人事件である。殺人の検挙率は過去から現在まで、95%以上という高い水準で一定している。殺人事件は行きずりの犯行よりも知人など何らかの面識のある者による犯行が圧倒的に多いため、そのほとんどが検挙になっている。

因みに発生が最も多かったのは昭和29年の3,081件であり概ね1,500~3,000件内外で推移している。

平成10年以降は全て1,500件以下におさまっている。治安の悪化は言われていたが決して殺人の数が増えたのではない。

ただ近年は、通り魔的な多人数を殺傷する事件、近親者による殺人事件等極めてセンセーショナルな事件が多く、実感として数字以上のものがある。

殺人事件（国外との比較）

来年、サッカーのワールドカップの開催が決まっている南アフリカ共和国は、平成19年中に1万8487件の殺人事件が発生している。1日あたり50人以上が殺されるというすさまじい数字である。

東京は同じ年には179人という数字であるが、発生と同時に犯人が検挙されている。現在都内では、年間20件くらいが犯人不明の事件として発生し、捜査本部を設置して捜査を行うことになる。捜査本部事件の解決率が殺人事件の実質的な検挙率ということになる。すなわち、9割以上の解決率である。

島根県の刑法犯罪の発生・検挙状況

一言で言って素晴らしい。発生は少なく検挙は多い。昭和48年の発生件数は全国で5番目に少なく、検挙率は秋田県に次いで2番目である。

平成14年の発生件数は2番目に少なく、検挙率は7番目である。平成20年の発生件数は全国一少なく、しかも検挙率も秋田県に次いで2番目であった。

因みに平成15年までは鳥取県が全国一発生件数が少なかった。

しかし、平成16年に島根県が鳥取県を抜いて初めて全国一となり、17年に鳥取県が返り咲いたが、18年以降は再び島根県が日本一犯罪の少ない県となっている。

島根県の凶悪犯の発生・検挙

凶悪犯罪とは、先に説明したとおり、殺人・強盗・放火・強姦事件である。昨年はまさに100パーセント検挙である。全国的に最悪であった平成14年でも高い検挙率であった。

なお、昨年島根県でおきた殺人事件は3件であったそうであるが、無論のこと全てが検挙となっている。

犯罪率（人口1万人当たりの発生件数）

人口1万人当たりの犯罪率を見てみると、平成19年中では島根県は81件であり、全国で6番目に低い数字である。発生件数は先に説明したとおり、この年も全国一少ない数字であった。

因みに19年中に一番犯罪率が低かったのは秋田県である。

平成における治安悪化の要因

現代の犯罪の特質として以下の点を挙げる。

悪質及び巧妙化は、外国の国際犯罪組織勢力の進出、組織暴力団のより一層の犯罪化等により、犯罪を生業とする者達による増加がある。また特にバブル崩壊後は組織的な経済犯罪が増加した。

「広域化及びスピード化」では、交通網の発達とともに生活圏が拡大し移動手段も格段にスピード化したことにより、犯行区域が広がり同一犯が複数の地域で犯行することが可能になった。

「国際化および匿名化」は人と物の交流が活発になり、文字どおり日本が国際化した。地域内の人づき合いが減ってきたことにより、人と人とのつながりが希薄になってきている。また携帯電話、インターネット網の発達により顔を合わせない、あるいは名前を表に出さないで意思伝達することが可能となってきている。

地域社会の脆弱化、人間関係の希薄化

先に説明した特質の部分と重なるが、特に都会においては団地・マンション等の共同住宅が増え、町内組織に入る人も減ってきている。

刑事が聞き込みに行っても隣に住んでいる人が誰か分からないことが増えてきている。つまり人からの捜査が困難になっている。

物流の活発化とインターネット網の発達

大量生産、大量消費の時代であり、犯罪に似使用される凶器に限ってみても購入は容易であり、逆に購入者の特定は極めて難しくなっている。

また携帯電話やインターネットが犯罪の道具となっていることも多いが虚偽契約、成りすまし契約等の匿名化が容易であり、犯人特定が難しい。物からの捜査が困難となっている所以である。

社会規範意識の低下

以前は「人の物は取らない」「人に迷惑をかけない」等と、子どもに対して親のみならず世間が道徳、ルールを常識的にしつける社会環境があり、これが歯止めになっていた面もあるのではなかろうか。

地域社会の希薄化に伴い「見つからなければよい」「捕まらなければよい」「俺は金が欲しいんだ」等と自分本位で短絡的に犯行する傾向にある。

現在、全国に蔓延している振り込め詐欺、あるいは都会で横行しているひったくり等に現れている。

また、発生事件の増加についてはクレジットカードの普及による犯罪の増加、損害補償制度の発達、被害意識の高まりによる届出の増加等の要因もある。

時を同じくして進行していた警察改革の一環で、いわゆる懲罰であっても厳格に処理し、正規に処理する姿勢を示し始めたことが数字を押し上げた一因である。

治安改善への努力

治安悪化は年々進み平成14年にピークに達したが、来日外国人捜査体制の充実、専門捜査員養成及び専門職の採用等を中心に全国警察では一丸となって努力した結果、現在かなりの水準まで良化したことは先に説明したとおりである。

今後もさらにこの傾向は続くものと確信する。3つの項目について若干補足する。外国人事件の捜査には入国管理局等関係当局との連携を密にしたことが大きい。また語学に堪能な捜査員を採用または育成して捜査に充てた。各都県では専門的な知識を必要とする経済事情、ハイテク犯罪に対処するため捜査員の育成を図ったり、公認会計士の資格を持つ者あるいは企業でコンピュータの開発に関わっていた者等の採用をすすめ専門知識を捜査に生かしている。

科学捜査力の強化の面では何と言ってもDNA型鑑定の実用である。DNAとは生物の細胞の核内に存在するデオキシリボ核酸の略称である。このDNAの中に各個体で異なっている部位がある。この異なっている部位を分析することによって、個人の識別が可能となったDNA型鑑定の精度はここ10年で飛躍的に高まり18年11月から採用しているSTR型検査法では約4兆7千億人に1人という確率で個人識別を行うことができる。

事件現場に遺留された犯人由来のDNA付着物を保管しておき容疑者が判明した時点で対照するという方法が一般である。警視庁では、これによって本年上半期のみでも約60人の犯人が特定された。

今後の課題

今後の課題として以下の点を上げる。

昨年、茨城県下のJR荒川沖駅、あるいは東京秋葉原に於ける無差別大量殺傷事件のように明確な犯行動機をもたず、自らの不満を自らの努力で解消しようとはせず、逆に社会に責任を転嫁し、全く関係のない第三者に危害を加える事件が非常に多くなっている。

豊かな社会にどっぷりつかって、忍耐や我慢することができなく自分を律することができない精神的に未成熟な人間が多くなっているのではないか。